

## 戦後日本における大衆健康雑誌の展開と構造 ——現代日本における健康文化の一側面——

瀧澤利行\*

### Evolution and Structure of Health Magazines Means of Health Culture in Modern JAPAN

Toshiyuki TAKIZAWA : Dept. of Public Health, Faculty of Education,  
Ibaraki University.

Health magazines have been published in Japan since the latter half of the nineteenth century, although the majority of current publications were started after World War II. Most of these are published monthly and feature a variety of health care methods, such as health food diets, physical exercise, use of health equipment, mental conditioning, utilization of hot spring, as well as various combinations of a few mentioned topics. Health magazines published after World War II can be categorised into three phases. The first phase lay from 1945 to 1970. The main functions of magazines published in this phase was the enlightenment of people about prevention of communicable diseases and improvement of diet. The second phase mainly included the middle of 1970's to the first half of 1980's. New health care coverages were introduced in the magazines published in this phase. Since the contents of magazines in this phase were similar, a detailed analysis of health care methods, which will reveal the characteristics of health care behaviors cultivated by people who subscribe to such publications, can be undertaken. The third phase began from the last half of 1980's and continues. In this phase, there are diversification of the role of magazines about the cultivation of health knowledge and behavior. Health magazines are regarded as one of health cultures in the popular sector.

---

\* 茨城大学教育学部公衆衛生学研究室

## キーワード

health magazine	健康雑誌
health information	健康情報
health care method	健康法
health culture	健康文化

## I 緒 言

現代日本は健康ブームであるといわれる（池田・佐藤1995）。様々な側面からその点が指摘されているが、その動向を顕著に示している現象の1つに大衆向け健康雑誌（以下、大衆健康雑誌）の盛行がある。1990年以降、毎年数冊の大衆健康雑誌が創刊されてきた。この動向は、1980年代前半期において国民の健康問題としての成人病への対策が関心を集めることになったこととほぼ時を同じくしている（杉田1994）。しかしながら、日本の大衆健康雑誌自体の成立の展開をみると、それはけっして近年に特有の現象ではなく、比較的長い歴史的経緯をもっている。むしろ、近年の盛行は、そのような歴史的展開の一過程であり、その展開のうえでの変容であるとみるべきである。

これまで、日本における健康雑誌の展開については、部分的には記述されているものの（立川1986），体系的に論じられた記載はほとんどみられない。大衆健康雑誌が大衆の健康や医療に対するディマンドを反映させて編集・発行されているとの前提に立てば、その雑誌群の成立過程や内容・特徴などを分析することによって、大衆の中に潜在する健康意識や保健行動を構造的に析出することができると思われる。

本稿では、日本における大衆健康雑誌の成立と展開を、主に第二次世界大戦後に焦点を絞って検証し、そこにどのような構造的特徴と方向性が示されているかを考察することを目的とする。

## II 方 法

研究方法は、第二次世界大戦後（一部それ以前を含む）に発刊された保健医療専門家以外を主たる対象読者とする大衆健康雑誌を資料とした文献的質的研究によった。対象資料は、第1期（1945年～1970年）、第2期（1970年代前半～1980年代前半）、第3期（1980年代後半～現在）の3期に分類し、それぞれの特徴を質的に分析した。主要資料は、国立国会図書館に所蔵されている雑誌バックナンバーを検索し、閲覧した。

## III 結果および考察

戦後の大衆健康雑誌と保健医療史の変遷を表に示し、以下3期に分けて論述する。

### 1. 『保健同人』の創刊—戦後第一世代の形成—

#### (1) 『保健同人』の創刊

##### ①創刊の経緯

1946（昭和21）年6月1日に、太平洋戦争後にわが国で発刊された本格的な一般健康雑誌であった『保健同人』（保健同人社刊）が刊行された。同誌を刊行した中心人物は、大渡順二保健同人社初代社長・保健同人事業団初代理事長であった。

大渡順二の私史によれば（大渡1986），彼は1904（明治37）年に岡山県に生まれ、1925（昭和元）年に京都帝国大学文学部哲学科選科に入り、美学を専攻した。卒業後の1929（昭和4）年に朝日新聞社に入社し、政治経済部の記者になった。

その大渡が、一転して『保健同人』の発刊に邁進するにいたった理由は、1943（昭和18）年に彼が結核を発病したことにある。大渡は、みずからの結核

戦後日本における大衆健康雑誌の展開と構造

表 戦後の大衆健康雑誌と保健医療史の変遷

	大衆健康雑誌の刊行	保健医療史の動向	政治経済・社会・文化的動向
明治期	『養生雑誌』(1880年) 『健康大観』(1910年)	西洋医学の採用 (1870年) 医制 (1874年)	帝国議会開設 (1890年) 社会主义思想台頭 (1910年) 大正デモクラシー 普通選挙実施 (1928年) 太平洋戦争開戦 (1941年) 広島・長崎原爆投下 (1945年)
大正期	『療養生活』(1923年)	(旧) 保健所法 (1937年) 厚生省設置 (1938年) 厚生年金保険法 (1944年)	
1945年8.15	『保健同人』(1946年)	(新) 保健所法 (1947年) 医師法・歯科医師法・医療法・ 保助看法 (1948年) 生活保護法 (1949年) 精神衛生法 (1950年)	日本国憲法 (1947年) 6・3制施行 (1947年)
1950年	『健康ファミリー』(1952年)		朝鮮戦争 (1950年) 日米安全保障条約 (1951年)
1955年		森永ひ素ミルク中毒 (1955年) 水俣病発生 (1956年)	造船疑惑 (1954年) 保守合同・日本社会党統一 (1955年)
1960年		学校保健法 (1958年) 国民年金法 (1959年)	60年安保闘争 (1960年頃)
1965年	『暮らしと健康』(1964年)	国民皆保険・皆年金 (1961年)  スモン病命名 (1964年) 母子保健法 (1965年)	東京オリンピック (1964年)
1970年	『毎日ライフ』(1970年)	公害対策基本法 (1967年) インタークン闘争 (1968年頃～) イタタイイタイ病原因確定 (1968年)	学園紛争激化・インタークン闘争 (1968年頃～) アポロ11号月面着陸 (1969年) 万国博覧会開催 (1970年)
	『明日の友』(1973年) 『壮快』(1974年)	環境庁設置 (1971年) 労働安全衛生法 (1972年) 老人医療費無料化 (1973年)	浅間山荘事件 (1972年) オイルショック (1973年) ベトナム戦争終結 (1974年)
1975年	『わたしの健康』(1976年)	アルマ・アタ宣言 (1978年)	ロッキード事件 (1976年)
1980年	『安心』(1983年) 『健康時代』(1983年)	エイズ症例報告 (1981年) 老人保健法 (1982年)	イラン・イラク戦争 (1980年) 教科書問題 (1982年)
1985年		基礎年金制導入 (1986年)	フィリピン革命 (1986年)
1990年	『わかさ』(1990年) 『ホスピタウン』(1993年) 『日経ウェルネス』(1994年) 『さわやか元気』(1994年) 『健康現代』(1994年) 『大丈夫』(1995年) 『ゆほびか』(1995年)	アクティブ80ヘルスプラン (1989年) エイズ訴訟 (1989年) 福祉関連8法改正 (1990年) 脳死臨調答申 (1992年) 精神保健法 (1992年) 環境基本法 (1993年) 老人保健福祉計画 (1994年)	リクルート事件発覚 (1988年) 昭和天皇崩御 (1989年) 東西ドイツ統一 (1990年) 湾岸戦争 (1990年) ソ連崩壊 (1991年)
1996年		地域保健法施行 (1997年)	55年体制崩壊 (1994年) 阪神大震災・オウム真理教事件 (1995年)

罹患を告げられても、市販の療養書や体験談を頼りに安静療法を採っていた。結核予防会の医師に当時始められていた外科的治療をすすめられたにもかかわらず、内科医の言を採り、安静療法を続けて、ついに悪化をきたしてしまう。そして、1944（昭和19）年9月28日に京都帝国大学医学部の結核研究所で胸郭成形術を受けた。当時の結核治療は、大渡が受けたような外科的治療が行われてはいたものの、大部分は安静と栄養を主とした内科的一般療法が採られており、無事に寛解をみた症例は少なかった。大渡は、自身が外科的治療によって快方に向かったのに対して、他の膨大な数のほる同病の人々が効果の薄い治療法や誤った大衆療法によって病勢を悪化させ、命を縮めていることに「公憤」を感じた。「医療の世界がかくも患者を迷わせて平然としていることへの痛憤」は、大渡をして、単なる療養体験者にとどまらせることなく、積極的な実践者へと変貌させた。大渡は、当時積極的な診断法の開発と治療法を展開させつつあった結核予防会の岡治道・隈部英雄の学説と方法に沿った結核患者啓蒙の大衆雑誌の発刊に向かって精力的に活動し始めた。

敗戦の翌年、1946（昭和21）年の2月1日、大渡は東京神田区三崎町の結核予防会館内に「保健同人社」を発足させ、発行の準備にとりかかった。資金的にも、また当時入手に困難をきわめた紙の調達についても、新聞記者時代や学校時代の先輩、友人たちの助力によって順調に用意され、雑誌の表紙画には当時はまだ新進画家であった東山魁夷があたった。

## ②編集方針

1946（昭和21）年6月1日、『保健同人』創刊号が発刊された。大渡は、その巻頭に「願ひ」と題する一文を掲げた。

「願ひ

健やかなるも驕らず、病めるも屈せず  
あかるく、逞しく、力をあはせ,  
お互の手で、お互のために、たすけあひませう  
六尺の床もわたしたちの天与の道場

ここにあたらしい生活の出発のあることを感謝しませう

病に親しむとともに

病を生活しませう——それは飽くまでも厳しく科学的に

いままでの迷ひを反省し

懷疑をはらひ、臆説をただして

新しい科学の大道に予防と療養の生活を再建しませう

道はただひとつ

——結核を科学しませう。」

この一文に、大渡の結核闘病の万感の思いと同病の人々への渾身の呼びかけがみなぎっている。劈頭を飾る「健やかなるも驕らず、病めるも屈せず」の一節は、健康のあり方がその人の人格と切り離しては実在しえないことを示した、古今を通じてなお指を屈しうる名言といえる。「六尺の床もわたしたちの天与の道場」から「病を生活しませう——それは飽くまでもきびしく科学的に」までのくだりは、健康の回復が人間の新しい生活創造の過程にほかならないことを明言している。大渡がこの「願ひ」によって示した健康の思想は、病とは人間が新しい生活と人格をつくる契機であるとする考え方であったとみていい。

結核の療養誌としては『保健同人』以前にも田辺一雄によって1923（大正12）年に創刊された『療養生活』があったが（福田1995），『保健同人』は戦後初めての，そして戦後の代表的な大衆健康雑誌の1つとして歩みを刻んだ。大渡が再三強調したことは「科学主義」であった。岡治道・隈部英雄の実績が『保健同人』発刊の誘因の1つであったことも作用し，同誌の記事は，科学的に検証しうる内容に限定しており，砂原茂一・久留幸男・宮本忍・三木威勇治・勝俣稔・石垣純二・松田道雄といった学術的にも実践的にも気鋭の人々に執筆を依頼していた。

『保健同人』の編集方針において，大渡がもう一点心がけたことは，読者すなわち結核療養者の誌面参加であった。療養記の投稿はいうまでもないことがあったが，「読者文芸欄」として和歌・俳句・川柳を設け，読者からの投稿を募った。選者には土岐善麿（和歌）・富安風生（俳句）・川上三太郎（川柳）

といった第一級の人々があたった。

こうした同誌の編集上の工夫が、やがて『保健同人』の「療友会」活動として広がっていくことになる。この活動は、花の種を贈り合う会、クリスマスカードを贈り合う会、柳友会（川柳）、海外短波放送を聞く会、切手同好会、カメラの会など多種多様であった。このような活動が広がっていった背景には、『保健同人』の基本思想の1つである「病を生活しよう」という療養活動を患者の生活形成と人間形成全体へと統合していく理念があった。この「療養の生活化」を花卉鑑賞・文芸・ラジオ鑑賞・写真・切手収集など文化活動を通じて支えていく点に、『保健同人』の果たした重要な役割があった。

『保健同人』の存在は、単に戦後の結核療養雑誌の代表であるばかりでなく、健康を大衆に生活課題として積極的に提示し、解決の指針を探究することを導く役割を担った。

## (2) 『保健同人』以降の第一世代雑誌群

『保健同人』創刊から6年後の1952（昭和27）年2月には、東京の文理書院から『健康ファミリー』が創刊された。同誌は、『保健同人』とは異なり、当初から疾病予防と健康増進を目的とした総合的な健康雑誌として発刊された。その特徴は、疾病の解説や一般的な予防法・治療法の解説のみにとどまらず、大衆の間で実践されている様々な健康法や民間療法を紹介している点にある。同誌は、以後に発刊されることになる大衆健康法や民間療法を紹介する健康雑誌の先駆的存在であった。

戦後の大衆健康雑誌の劈頭を飾った『保健同人』は、東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年6月に誌名を『暮らしと健康』へと改題した。この改題は、『保健同人』が主題としてきた結核療養が、すでに大衆の第1順位を占めるべき健康課題ではなくなりつつあったことを象徴していた。外科的治療はもとより、栄養状態の向上、抗生物質の登場、BCGの接種などが、結核による死亡を次第に減少させていたのである。この時期から日本人の健康への関心は脳血管疾患やがんなどの成人疾患へと移りつつあった。『暮らしと健康』

戦後日本における大衆健康雑誌の展開と構造の主題もまた、『保健同人』における結核中心から健康課題全般へと拡大されていた。

『暮らしと健康』の編集方針は、『保健同人』と同様に、一貫した近代医学に対する信頼にあった。効果や安全性が実証的・科学的に十分に確認されない健康情報や健康法については、たとえそれらが世上でどれほどもてはやされとしても取り上げない姿勢を発刊当初より今日まで固守している。『暮らしと健康』のもう1つの特徴は、これも『保健同人』以来の伝統ともいえるが、読者の疑問や要望を大切にする記事づくりを意識していた点である。読者の健康上の不安にていねいに回答するQ&Aを記事内容として構成した誌面は、読者から誌面参加への契機をつくることができた。

1970年代に入ると、それまで『暮らしと健康』『健康ファミリー』の2誌のみといつても過言でなかった大衆健康雑誌の領域に新たな雑誌が参入するようになった。『暮らしと健康』と同様に堅実で地味な性格の雑誌として、1970（昭和45）年に毎日新聞社から『毎日ライフ』が、1973（昭和48）年に婦人の友社から『明日の友』などが発刊された。両誌とも、健康専門の大衆雑誌というよりも、壮年期以降の総合生活誌の性格が強い。いうまでもなく、記事の主流は健康に関する内容であったが、近代西洋医学の理論と診断・治療技術をもとにした科学的記述が特色である。この時期までには、日本公衆衛生協会から『健康ガイド』や株式会社エーザイから『生活教育』が刊行され、一般的な健康教育の媒体としての健康読本の活用も図られた。しかしながら、この時期以降、大衆健康雑誌はより多元的な内容と読者層の拡大、雑誌そのものの商品化へと移行していく。

## 2. 戦後第2期の大衆健康雑誌（第二世代）

### (1) 視覚重視型雑誌の登場

一方で、1970年代前半から中葉にかけて、1990年代前半時点での大衆健康雑誌の主流を占める雑誌が創刊された。『壮快』は、1974（昭和49）年にマイヘルス社の編集・発行によって講談社より発刊された。その2年後の1976（昭和

51) 年には主婦の友社から『わたしの健康』が発刊された。

この両誌は、その構成も内容もきわめて似通っている。全体的な特徴として明らかな点は、グラビアと広告が大量に導入されていることである。この点は、『暮らしと健康』『毎日ライフ』『明日の友』などの「第一世代」の雑誌群とは明らかに異なる性格である。1970年までに発刊された雑誌は、どちらかといえば装丁やデザインも地味で質素であり、写真などもモノクロを中心としていた。これに対して、『壮快』や『わたしの健康』は、その発刊当初から、写真もカラーを用い、各種の健康体操やツボ療法の解説には若い女性モデルを登場させるなど、グラビアページを中心に色彩感とリアリティに配慮した構成を意図している。

構成面にもまして「第一世代」との差異が顕著な点は、その内容である。「第一世代」では、『健康ファミリー』においては大衆健康法や民間療法が取り上げられていたが、『保健同人』『暮らしと健康』の「科学尊重主義」はもとより、『毎日ライフ』や『明日の友』もまた近代西洋医学を基本とした内容と論理でほぼ一貫している。

これに対して、「第二世代」ともいべき『壮快』や『わたしの健康』では、第一世代の中の1誌『健康ファミリー』がみせた大衆健康法や民間療法への接近を、むしろ自誌の特徴として全面において強調している。そしてこの傾向は、1983（昭和58）年にマキノ出版から編集・発刊された『安心』や同年に主婦と生活社から発刊された『健康時代』においても同様である。『安心』は、誌名こそ異なっているが『壮快』の僚誌であり、発行所も『壮快』の編集・発行所と同一地に置くなど連携を保って編集・発行されてきた。『健康時代』は発刊から1年を経て無期限休刊となっている。

## (2) 第二世代雑誌群と第一次健康ブーム

第二世代の雑誌群は、1970年代中葉から1980年代前半にかけての健康法の第一次ブームに乗って発行・販売部数を伸ばすとともに、そのブーム自体を先導する役割を担った。たとえば、この時期に世情をにぎわせた「クロレラ」「紅

## 戦後日本における大衆健康雑誌の展開と構造

茶キノコ」「～酵素」などの健康食品や「ぶらさがり健康器」などを用いた健康法はもとより、ジョギングなどの正統的な運動法もまた、第二世代の雑誌群の常連記事であったとともに、第二世代の雑誌群の記事として取り上げられたがゆえに全国的に知られ、大衆の多くが試したり関心をもたれるにいたったのである。

では、なにゆえに第二世代の雑誌群は健康法ブームに乗ることができ、かつそのブームを先導することができたのか。その理由は大きく2点に求めることができる。

その1つは、これらの雑誌群が刊行され、発行部数を伸ばし始めた時期は、国民の健康課題が本態性高血圧や動脈硬化・冠状動脈性心疾患・糖尿病・痛風などの慢性疾患の増加とそれに基づく有病率の上昇が顕著になった時期と重なっていたことである。これらの慢性疾患は、通常「成人病」と呼ばれるように、成人期の生活習慣を中心としたライフスタイルに発症の起因があるとされてはいるものの、なおその原因は明確になっていない。一定期間の治療によってほぼ治癒が期待できる急性疾患と異なり、治療効果の検証には長期間を要し、しかも日常の飲食起居動静について規制がある慢性疾患は、大衆にとって漠然とした予後への不安を催させる。大衆は現代医学を受け入れつつも、いわゆる「第二選択(alternative choice)」として、現代医学とは直接関連がないと思われる様々な健康法を実践するようになる。加えて、1960年代前半から1970年代前半までに顕在化していた公害被害は、自然破壊・環境汚染が人間の健康に甚大な悪影響を与えることが明白になり、消費者運動においても自然食と称される無農薬栽培や無添加の食品などが求められるようになっていた。健康法ブームは大衆の現代医療への疑問や躊躇をすくいあげつつ高くうねってきたのである。

いま1つは、第二世代の雑誌群で取り上げられた数々の健康法は、大衆がきわめて受け入れやすい条件を具備していた、ないしは具備するべく創造されたことである。すなわち、比較的安価で入手しやすく、また生活の中での短い時間と狭いスペースで実行可能な素材や方法が選ばれた。試みに、第二世代の雑

誌群の各項目を抽出してその見出しを一覧してみると「押す（もむ）だけでピタリと痛みが止まる～」「一日～分間～するだけでみるみるやせる」など、実行の簡便さを強調する表現になっている。すなわち、いかに生活の中で容易に実行できるか否かが「第二選択」としての健康法の重要な条件であった。

みずから生活を悩ます不快な慢性疾患が日常生活の中での簡単な動作や運動、あるいは食品の摂取で治癒ないし軽快するとなれば、大衆の多くはそれを実行することに興味を覚える。大衆を対象とした様々な健康法は、みずからの健康不安を自分自身の努力によって解決したいという大衆の要求を背景しながら、その展開の場を第二世代の健康雑誌群に求めていったのである。

そのことは、これらの雑誌群で取り上げられている健康法の多くが現代医学に依拠するものよりもむしろ東洋医学に基づく漢方やツボ・経絡療法（鍼灸・指圧・あんま）、マッサージ、整体、ヨガ、気功および食養が圧倒的に多くなっていることにも示されている。欧米においても、この当時から前述のような東洋医学や前近代的な医学に関心が示されるようになっていた（Stanway 1980）。ロック（1980）が指摘したように、大衆は病院や診療所に通院して投薬や処置を受けるなど現代医学の下に身を置きながらも、広い意味で東洋医学や伝統医学の影響下にある各種の健康法に現代医学の限界を超えるインスピレーションされた力を期待しているのである。

### (3) 健康の「商品化」と大衆健康雑誌

第二世代の健康雑誌群が示しているいま1つの性格は、記事内容はいうまでもなく、広告も含めて、雑誌の存在自体が健康食品（機能性食品）や健康器具などの「商品」と深く関連していたことである。第一世代の雑誌群にも当然のこととしてなんらかの広告は掲載されているが、第二世代の雑誌群に掲載されているおびただしい数にのぼる広告・宣伝はそのほとんどが健康食品や健康器具のそれである。それにとどまらず、『壮快』と『安心』は、「壮快薬局」を開設・展開して、誌上で紹介された漢方薬・健康食品・健康器具などを実際に店頭販売してきている。

この事実は、第二世代の雑誌群がいわゆる「経営の多角化」戦略に基づいて、記事内容や広告と商品販売とを有機的に連動させて商品化されていることを示しているが、それは同時に、この時期すなわち1970年代半ばから1980年代前半期にかけて、大衆の健康形成が「物象（モノ）」に依存して展開されるようになってきたことをも意味している。すなわち、個人の健康実現を健康食品なり健康器具なりの「モノ（商品）」の購入と使用によって具体化しようとする観念の成立にほかならない。この「健康の商品化（モノ化）」は、生活のあらゆる側面が貨幣によって商品やサービスを購入し消費することによって成り立つ高度消費社会を象徴する現象であるといつていい。

### 3. 第三世代雑誌群とヘルス・ディマンドの多様化

大衆における「健康の商品化」を促進した第二世代の雑誌群の発刊からほぼ10年の間隔を置いて、大衆の健康雑誌は新しい局面を迎える。それは、具体的には1990年代初頭以降に画されるいわゆるポスト・バブル経済体制下で顕著になった健康雑誌発刊ブームに該当する。

この時期には、1990（平成2）年にわかさ出版から『わかさ』、1993（平成5）年に日本医療企画から『ホスピタウン』、1994（平成6）年には日経BP社から『日経ウェルネス』、成美堂出版から『さわやか元気』、現代書林から『健康現代』、1995（平成7）年には尚健社・小学館から『大丈夫』と、相次いで6誌が発刊されている。この空前ともいえる発刊ラッシュによって、この時期の健康雑誌は「第三世代」と呼びうる活況を呈するにいたった。

「第三世代」の健康雑誌の性格は、ほぼ二分される。1つは、「第二世代」の雑誌の特徴である「第二選択」としての非現代医学的大衆健康法の紹介・解説のパターンを踏襲している型である。この型においては、健康に関する商品の広告や宣伝を掲載していく構成もまた踏襲されている。いま1つは、どちらかといえば「第一世代」の健康雑誌が担っていた医療に関する正確な情報を読者に伝達する役割を踏襲した型である。しかも、「第三世代」のこの型の健康雑誌が中心とした情報内容は、「第一世代」のように疾患や療養に関する

る基礎情報のみならず、医療機関（病院・診療所）や専門医、薬剤などの情報や新しい治療法の紹介、さらには化粧や入浴、美容・痩身、社会保障の情報にいたるまで、健康と医療に関するあらゆる情報を対象としている。いうなれば健康と医療に関する総合情報誌へと転換していることが示されている。

特に、医療機関・専門医と薬剤に関する情報は、「第三世代」の情報提供型の雑誌群が最も力を傾注しているとみられる内容である。この時期と時を同じくして、書店の健康・家庭医学コーナーに目立つようになった本が「医者からもらった薬がわかる本」「名医ガイド」「この病気この名医」「病院の検査がわかる本」「検査のデータ早わかり」といったタイトルに象徴される医療の手引き本の類いである（松岡他1995）。また、一般の週刊誌でも重要疾患の予兆と専門医療機関リストを連載した。そして、これら一連の動向の典型が、宝島社から1994年に刊行された別冊宝島『全国病院ランキング』であるといえる。この本は、各疾患について、それぞれの疾患についての専門雑誌の論文数や症例報告などをもとに、全国の医療機関をランキングした内容であった。

このような記事や書籍が読者の関心をひいた理由は、単に大衆の間に医療についての漠たる不安や薬害や誤診などの医療不信が存在するという点にとどまらない。そこには、より積極的な医療についての情報公開（ディスクロージャー）の意識の高まりが存在していることを見逃してはならない。

これら健康雑誌やそれと連動した書籍の内容に医療や健康科学に関する情報公開が含まれるようになってきた背景には、2つの契機が存在しているとみられる。その1つは、患者（医療需要者）側と医療供給者側の双方の医療に対する意識が1980年代後半以降、急速に高まってきたことである。それまでの医療供給者と医療需要者の関係は、少なからぬ例外はあるにせよ、医療供給者側の「依らしむべし、知らしむべからず」の意識を双方ともに暗黙の前提としてきた。しかしながら、ターミナルケア（終末期医療）・臓器移植・脳死・遺伝子医療などの新しい医療動向は、医療倫理あるいはバイオエシックス（生命倫理）の必要性を喚起し、「患者の知る権利」を提示した。医療供給者も「インフォームド・コンセント（説明のうえでの合意）」を少しづつ意識するようになっ

戦後日本における大衆健康雑誌の展開と構造てきた。その結果として、それまでは患者にとってはいわば深い霧に包まれた樹海のようであった医療の世界をできるかぎりわかりやすく示す「案内図」が求められ、また作られるようになってきたのである。

いま1つは、日本社会全体の自由化と商品の多様化の動向のもとで、医療や健康関連産業においても、様々なレベルでのサービスの開発がなされるようになってきたことである。それ以前の医療サービスは、健康保険法や国民健康保険法の診療報酬支払いの基準に沿ったサービス内容が主流であったが、近年では様々な領域で付加価値を伴った医療サービスが開発され、実際に供給されている。たとえば全病室の個室化やデパート職員による病院ボランティアなどは、その実際的な効果は別にしても、それまでは考えられなかつた質のサービスである。医療供給者は、こうしたサービスを需要者に周知して利用効率を高めなければならない。そのためには様々なメディアによってサービスの多様化をアピールする必要が生じてきたのである。

#### IV 結 言

日本の大衆健康雑誌を主に戦後に焦点を絞って考察してみると、3つの段階を経て20世紀を終えようとしている。本稿で「第一世代」と呼んだ昭和20年代に創刊されたいわば「老舗」雑誌は、その内容をできるだけ正統的医学すなわち現代の科学的医学に近づけることによって、専門家としての医師の考え方を大衆に広く普及しようとした。それは、いうなれば戦後の荒廃のなかから復興と軌一した進歩と知性をエネルギーとした「啓蒙主義」の所産であった。「第二世代」の雑誌が創刊された1970年代半ばから1980年代初頭は、復興の加速によって高度成長した日本社会が孕んでいたいくつかの歪みが公害や職業性疾患の増加によって顕在化した時期であり、ある種の「科学不信」に促されて非科学的ないしは反科学的な内容も含んで民間の大衆健康法に大きく指向が傾斜していった。そして、「第三世代」が創刊された1980年代末から1990年代前半は、正統的医学と非正統的な健康法が混在しながら、マルチメディア戦略も絡んで

健康情報の新たな供給形態が模索されつつある。

しかしながら、「第一世代」から「第三世代」にいたる健康雑誌の動向をみると、そこに一貫して変わらない性格をみることも可能である。少なくとも、筆者が認識している戦後日本の大衆健康雑誌がもつ共通する性格は、各々の雑誌が読者すなわち患者や患者予備群から健康を過剰に志向する人々にいたるまでがみずからの判断と実行によってとりうる健康行動の選択の幅をできるだけ広げる方向で編集されている点である。たとえば、大渡順二が『保健同人』において結核の様々な療養法を紹介したこと、『第二世代』の雑誌群に掲載されたおびただしい数にのぼる健康法も、読者がそこからみずからの健康状態や価値観・生活信条に適した方法を選択することを導く役割を含んでいる。

それは、言い換えれば大衆の1人1人がみずからの手で健康になっていくための営みに応えることにほかならない。田邊（1988）や新屋（1995）らは、都市の治療師やその受療者の行動を歴史的・実態的に分析して、それを自然治癒力と関係の治癒力への志向と指摘している。この知見は、現代の医療不安や医師患者関係への反問を含んでいるとみられる。いうまでもなく、民間療法が大衆健康雑誌で紹介される場合、近年の「健康の商品化」イデオロギーとそれに規定された販売促進戦略が存在しているし、そのなかで触れられた内容が時には人々の健康を損なった場合も決して少なかったわけではない。しかしながら戦後日本の大衆健康雑誌が単なる健康の商品化のための「先兵」にすぎなかつたのかといえば、それには即座に同意しかねる。大衆健康雑誌が現在にいたるまで市場性を確立して存続している事実は、発行者のコマーシャリズムや編集者の世論形成への意志を超えて、大衆自身の健康についての自立性への意図によって成り立っていることを示している。レスリー（1976）やマッケロイとタウンゼント（1989）によって指摘されたような「多元的医学・医療システム」の中に身を置き様々な医療手段に依存しつつも、いかにそれらへの依存から相対的に自立してみずからの健康を形成するかという大衆の意志が、みずからの形成手段（文化化の方法論）として「健康雑誌」を選択させていると考えられる。その意味では、大衆健康雑誌は戦後日本社会が生み出した「健康文化」の

代表例であるといえる。

残された課題は、大衆の健康についての文化化の媒体としての健康雑誌が、その内容においても所期のような成果をもたらしうるのか、その際に大衆の健康についての思考や行動、そして生活全体はどのように変容するのかについて、実証的な考察を加えることである。これは、筆者自身の今後の研究課題でもある。

## 文 献

- 1) 新屋重彦・島薦進・田邊信太郎・弓山達也 (1995), 癒しと和解—現代におけるCAREの諸相—, 成蹊大学アジア太平洋研究センター.
- 2) 福田真人 (1995), 結核の文化史, 名古屋大学出版会.
- 3) 池田光穂・佐藤純一 (1995), 健康ブーム, <黒田浩一郎編, 現代医療の社会学, 世界思想社, p.263-278. >
- 4) Leslie,C.(1976), Asian Medical Systems. Berkeley:University of California Press.
- 5) Lock,M.M.(1980), East Asian Medicine in Urban Japan:Varieties of Medical Experience. Berkeley: University of California Press.
- 6) 松岡正純他 (1995), 保健的社会化に関する研究(その3)一書店の健康コーナーの現状と課題—, 日本公衆衛生雑誌, 42(10)特別付録 (第54回日本公衆衛生学会総会抄録集) : 344.
- 7) McElroy,A., Townsend,P.K. (1989), Medical Anthropology in Ecological Perspective. 2nd ed. Boulder: Westview Press.
- 8) 大渡順二 (1986), 病めるも屈せず 一保健同人の旗をここに— 大渡順二文集 I 私史, 保健同人社.
- 9) Stanway,A.(1980), Alternative Medicine. Penguin Books.
- 10) 杉田秀二郎 (1994), 健康観に関する心理学的研究(第3報), 日本健康心理学会第7回大会講演集.
- 11) 立川昭二 (1986), 明治医事往来, 新潮社.
- 12) 田邊信太郎 (1989), 病と社会 一ヒーリングの探究—, 高文堂出版社.